



Title	現代フランス語における二次的な色彩を表わす表現について : couleur を中心に
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 40-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91548
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代フランス語における二次的な色彩を表わす表現について

—couleur を中心に—

春木仁孝

1. はじめに

筆者は春木(2016)において、*côté*, *niveau*, *question*, *genre*, *façon*, *style* などある種の名詞が前置詞的あるいは副詞的な機能語へと文法化している現象について考察した。これらの表現は、それぞれに異なる点もあるものの、最も単純な場合は *côté look* 「見かけに関しては」や *niveau transport* 「輸送に関しては」、*façon James Bond* 「ジェームズ・ボンドばりの」のように名詞＋名詞という構造を取り、前置された名詞が前置詞的な機能を持つようになった。*genre*, *style* などには文を導入するような用法もあるが、これらも出発点は名詞＋名詞（句）という構造であると思われる¹。

さて *côté*, *niveau*, *question* などが機能的な表現として名詞を従える形式は 20 世紀後半に大きく発展するが、それと並行して *emballage cadeau* 「プレゼント用包装」、*assurance maladie* 「疾病保険」のように後置された名詞が先行の名詞を修飾・限定するというタイプの表現も多く見られるようになってきた。たとえば英語では先行の名詞が形容詞的に後続の名詞を直接的に修飾するのはごく一般的な表現形式である。一方、形容詞をはじめ修飾要素は原則として名詞に後続するフランス語では、後続の名詞が先行の名詞を何らかの意味で修飾・限定する場合は、原則として両者の間に *de*, *à*, *pour* その他の前置詞を介する構造を取る必要がある²。しかしこのような表現は構造的にはどうしても重くなる。

emballage cadeau のような表現が増えてきた理由については、分析的で長く重い表現を嫌って直接的でコンパクトな表現がより好まれるようになってきたからである、というようにことがすぐに考えられる。実際、後置名詞による修飾・限定についての先駆的な研究と言える Noailly (1990) もほぼそのような結論に至っている。後続の名詞が先行の名詞を前置詞なしで修飾・限定する現象には詳細に検討すべき問題点もあるが、いずれにしろ、たとえば分析的な *emballage pour cadeau* に対して *emballage cadeau* のような直接的でコンパクトな形式の使用が拡大しつつあるという現象は、現代フランス語の性格を語る上で避けて通れないものになっている。

以上のような現象の存在と関連して、やはり名詞＋名詞という構造を取る以下の例にみられるようなタイプの表現が存在する。例(1)(2)は *Le Bon Usage* からの、例(3)－(8)は Noailly (2006) からの例である。

- (1) *un vélo modèle course* 「競技用モデルの自転車」

¹ *genre* と *style* には文を導入する引用マーカー的な機能もあり、さらに *genre* はディスコース・マーカー的な発展を遂げた。これらは文法化がより進んだ結果と考えられる。これらの問題については春木(2016, 2020)を参照されたい。

² 一部に *Hôtel-Dieu* 「(パリの) 市立病院」(原義「神の家」) のように後続の名詞が先行名詞を修飾しているような表現があるが、これは後続の名詞がもともとは被制格に置かれて属格の働きをしていた古い時代の表現が残ったものである。中世の散文作品のタイトル *La Mort le roi Artu* 「アーサー王の死」なども同様である (*le roi Artu* は被制格)。

- (2) un pyjama *taille 50* 「サイズ 50 のパジャマ」
- (3) un manteau *couleur aubergine* 「紫色のコート」
- (4) une édition *format poche* 「ポケット版の本」
- (5) une grande fille *format topmodel* 「トップモデル的な背の高い女性」
- (6) un fusil *modèle 1916* 「1916 年型の銃」
- (7) une location *formule weekend* 「週末専用のレンタルプラン」
- (8) un champion *catégorie poids plume* 「フェザー級のチャンピオン」

これらの表現の特徴は、名詞が三つ並ぶ構造を取っている点である。いずれもヘッドの名詞の後ろに「色、サイズ、形式、モデル」などを表わす名詞が来て、それらのカテゴリーに関して最後の名詞によってサブカテゴリー化を行なっている。意味構造的には (1)であれば *modèle course* 「競技用モデル」全体が先行名詞 *un vélo* を修飾・限定しているのである。使われている *modèle, taille* などの名詞はいずれもあるカテゴリーに関して内容の指定が必要な名詞類である。(1)であれば *modèle pour course*、(4)であれば *format de poche* のように前置詞を介して指定を受けることもできるが、いわば指定を必要としているということで、サブカテゴリーの特徴を指定する名詞を引き寄せる力が強いと考えられる。そのことがより直接的な同格的表現を生み出した大きな理由であろう。Noailly (2006)はこれらの表現形式を用いることで前置詞の多用を避けることができるという (*ruban de couleur d'aubergine*→*ruban couleur aubergine*)。また彼女も指摘するように、これらの表現においては *couleur, format, catégorie* といった名詞を省略して、*un manteau aubergine* とか、*un champion poids plume* のようにより短かくコンパクトに言えることも多い。つまり *couleur* などの名詞はカテゴリーを指示するだけで実質的意味内容に乏しく、*façon* のように後続の名詞と一体となって新たなカテゴリーの構築を要請するという強い操作は認められない。単に色なら色というカテゴリーを指定してヘッド名詞と修飾・限定の内容をもたらす後ろの名詞とをつなぐ役割を果たしているだけと言える。ただしその修飾・限定は色というカテゴリーの中での特定の詳細な指定をするサブカテゴリー化という操作と考えることはできる。このようにカテゴリー化のレベルの違いなどもあるが、名詞を重ねるという構造上からも、春木 (2016)で取り上げた *côté, niveau, genre, façon, style* などの機能語化している名詞などの場合とある意味、連続的な現象と考えることが可能である。

本稿では、上に挙げた表現の中から二次的な色彩を表わす表現で用いられる *couleur* という語に焦点を当て、名詞による修飾・限定という観点から *couleur* を含まない場合も含めて二次的な色彩を表わす表現に関するいくつかの問題を考察する。

2. 機能語 *couleur* と二次的色彩表現

2. 1. 表現形式

まず、実際に *couleur* を用いた色彩表現の実例を見てみよう。基本的な構造は<ヘッド名詞+*couleur*+限定の名詞>というように名詞が三つ連続するものである。

(9) une Mercedes *couleur saumon* stationnée devant moi

「私の前に停まっているサーモンピンクのメルセデス」³

(10) La maîtresse avait une belle permanente *couleur sable*, comme si elle avait une tempête du désert sur la tête, je trouvais ça très beau. (Bourdeaut : 39)

「先生はまるで砂漠の嵐を頭にのせているような砂色の美しいパーマをしていた」

例(3)(9)(10)では、ヘッドの名詞、*couleur*、そしてある色を呈する物を表わす名詞という構造を取っている。三つ目の名詞は意味の拡張を受けて、それぞれ「ナス色の」「サーモンピンク色の」「砂色の」という形容詞と考えることもできる。実際これらの語については多くの辞書に形容詞の項が設けられている。ある名詞が二次的な色を表わすために後置されて用いられる頻度が高くなれば辞書に形容詞の項がたてられるが、しかし性数については無変化であり名詞性が強いことには変わらない。そもそも *saumon* や *aubergine* が色を表わす形容詞であるならば、*couleur* は意味上も構造上も必要ないのである。実際、*saumon* などが形容詞かどうかは別として、これらの例は *couleur* なしでも成立する。それではどうして *couleur* が用いられるのだろうか。それは *aubergine* や *sable* などが名詞として「ナス」や「砂」を表わしているのではなく、その名詞の指示対象が持つ特徴的な色を表わしていることを認識しやすくするという理由が少なくともその起源にあったと考えられる。

couleur は名詞が指示対象のモノからそのモノが持つ色へと比喩的に意味が拡張されている場合に、いわばワンクッションとして「～のような色」というような意味を担っている(cf. *comme*)。筆者は機会ある毎にフランス語が隠喩的表現を好むということを指摘してきたが、このフランス語の隠喩的表現を好むという性格が、色彩表現において *couleur* を省略した「隠喩的な構造」が受容される背景にもあると考えられる⁴。

couleur に後続して色彩表現を作る *aubergine* などの名詞要素は、上で述べたように性数について無変化であれ少なくとも辞書においてはその物の色を表わす形容詞として記述されていることが多い。ただ二次的な色を表わす名詞の中には名詞性が強く <*couleur de*+名詞>という構造をとるものもある。たとえばある種の「灰色」を表わす *couleur de muraille* という表現は *un manteau couleur de muraille* のように前置詞 *de* を取ることが比較的多い。このような名詞も存在するが、一般的に現代フランス語において *couleur* と後続の名詞表現との間につなぎの前置詞 *de* が用いられる頻度はかなり低いようである。筆者の収集例の中でも *couleur de*+名詞という形を取る例は非常に少なかった。

(11) *cheveux couleur de maïs* 「トウモロコシ色の髪」

(12) (ある女性の描写) *Une créature aux jambes interminables, à la peau d'albâtre et aux cheveux couleur de rouille.* (Musso : 77) 「錆色の髪」

³ 文の形での引用の場合以外は例の出典は省略する。出典のない例の冠詞の有無および冠詞の定・不定の別については引用元のままである。また色彩表現以外は理解に必要な部分のみを訳している。出典の指示は作者の姓とページ数のみとする。具体的な引用作品は引用作品欄を参照されたい。

⁴ 様々な現象において日本語が直喩的な表現を好むのに対して、フランス語が隠喩的な表現を好むという傾向があるというのが筆者の考えであるが、それについては春木(2017)や春木(2021)を参照されたい。

(13) Le ciel offrait une toile de fond bleu Klein, aux feuilles *couleur d'ambre*.

(Margerand : 197)

「木々の琥珀色の葉に空がクラインブルーの背景となっていた」

以上の例の *maïs, rouille, ambre* も *de* を介さず *couleur* に後続して用いることもできる⁵。

二次的な色を表わす表現には *café au lait* 「カフェオレ色」(例 : *des tourterelles café au lait* 「カフェオレ色のキジバト」) や *caca d'oie* 「黄緑色」(例 : *des chaussures caca d'oie* 「黄緑色の靴」) のような複合名詞も多く見られるが、そのような複合名詞の場合も *de* を介さないで *couleur* に直接後続することが多い。

(14) *cheveux couleur café au lait* 「カフェオレ色の髪」

(15) *tabourets d'école couleur caca d'oie* 「黄緑色の学校用スツール」

(16) *mocassins couleur saint-émilion* 「あかね色のモカシン」

(17) *les étagères couleur bois d'ébène* 「黒檀色の棚板」

(18) *une lumière phosphorescente, couleur menthe à l'eau* 「透明感のある緑色の輝く光り」

(19) *un toubib au bronzage couleur pain d'épice* 「キャラメル色に日焼けした医者」

また *couleur* が導入する名詞が形容詞を伴う表現もよく見られる。以下の *saumon nacré* も *beurre frais* も色彩表現としてよく用いられるものであり、形容詞を伴う場合は<名詞+形容詞>がある程度、色彩表現として定着したものである場合が多いことが予想される

(20) *le fard couleur saumon nacré* 「光沢のあるサーモンピンク色の白粉」

(21) *les candélabres allumés projetaient un halo couleur beurre frais sur le revêtement de marbre des murs.* (Szabó : 219)

「ともされた大燭台が壁の大理石の上に薄黄色の輝きを投げかけていた」

以上、*couleur+de+名詞*、*couleur+名詞*、*couleur+複合名詞*、*couleur+名詞+形容詞* という形式の例をみたが、いずれも *couleur* 以下の要素が二次的な色を指定して *couleur* を通してヘッド名詞を色彩について修飾・限定をしている。このような表現における *couleur* は日本語のたとえば「錆色の」という表現の「色の」という部分に対応している。日本語の場合は基本色⁶、および基本色を表わす要素を含んだ形式の場合以外は原則として「色 (の)」という部分が無いと表現が成立しないか、修飾要素が色を限定していることが理解できない場合が一般的である⁷。この点でフランス語とは対照的である。

couleur を用いた表現の中には(22)のように *couleur* の後ろに限定を受けた基本色が来る

⁵ *ambre* 「琥珀色、黄褐色」は *d'ambre* のように *de* と共に用いられることが比較的多いようである。また名詞 *ambre* ではなく、*ambré* という形容詞が用いられることも多い。

⁶ ここで基本色と言うのは、日本語に関しては一般的に「～色」という形式を取ることなく用いることができる主要な色という便宜的な分類であって、色彩科学的に厳密に定義できるようなカテゴリーのことではない。

⁷ たとえば紺に対して茄子紺は「色 (の)」がなくても使用できる。やや文学的な表現になるが「利休鼠の雨が降る」の「利休鼠」はねずみ(色)という主要な色のサブカテゴリー表現であって例外ではない。伝統色の中には「蘇芳」や「お納戸」のように「色」なしで用いられる二次的な色彩表現も若干存在している。本稿では日本語については深くは立ち入らず簡略化して比較していることをお断りしておく。(外来語による色彩名についても考慮していない。)

場合がある。couleur を伴わない例も挙げておく。

(22) une voiture *couleur vert pomme* 「黄緑色の車」

(23) une pèlerine *vert pomme* 「黄緑色の袖無しマント」

vert 「緑」は基本色を表わす語であり単独で名詞にかかる場合は形容詞として性数の変化をする。しかし基本色を表わす形容詞も couleur のあるなしにかかわらず限定要素を伴うと性数無変化で用いられることはよく知られている。(ちなみに(22)でvertに先行するcouleurも名詞としては女性名詞である。)

2. 2. couleur の機能

couleur は本来は名詞であるが、ここで問題にしている構造においては後続の要素と共に全体として「～色の」という表現を構成している。couleur 以下全体を名詞句と考えれば、ヘッド名詞に対して同格的にかかっている。ただ現行の辞書の中にはこのような構造を取る couleur を無変化の形容詞としているものもある。それは couleur を名詞に後置したこの種の表現の頻度が高いことによると思われるが、そのような分析には無理があると言わざるを得ない。たとえば *dessert maison* 「自家製のデザート」のように後続の名詞が先行の名詞を修飾・限定する名詞＋名詞という構造において、後置されるある特定の名詞の頻度が高くその適用範囲が拡大したものについては無変化の形容詞とする辞書の扱いは、少なくとも外国語学習という観点からは理解出来る。実際、*maison* については上記のような用法についてはほとんどの辞書が無変化の形容詞としている。しかし、さらに後置要素を必要とする couleur の場合と *maison* の場合とでは表現の構造そのものが異なっている。いずれにしろ *dessert maison* のような表現における *maison* や、ここで問題にしている構造における couleur の品詞を云々することにはそれほど意味はない。重要なのはその機能である。

機能語としての *niveau* や *genre* が、元々は前置詞句の中の中心的な名詞が前後の前置詞や冠詞が省略されてその機能を拡大して文法化してきたものであったように、couleur にも前置詞句的な表現が元にあったと考えることもできる。実際、前置詞によって導入されている例もある。

(24) Sur ce cliché *aux couleurs délavées*, Louis a deux ans, (...). (Sandrel :278)

「全体がにじんだ色のようにになっているこの写真ではルイは2歳である」

(25) (...) une simple fiche dans une chemise *à la couleur bleu ciel* qui a pâli avec le temps. Presque blanc, lui aussi, cet ancien bleu ciel. (Modiano :11)

「時と共にその色が褪せてきた空色の書類鞆の中の一枚のカード」

(26) des uniformes forestiers *de couleur kaki* 「カーキ色の森林管理員の制服」

(27) des chaussures de ski *de couleur bordeaux* 「ワインレッドのスキー靴」

couleur を導入する前置詞には de または à が見られる。ただ、(24)の例は特定の色彩を表わすというよりは写真全体の色がにじんだようになっているという意味であり、いわゆる特徴を表わす à による表現であり、本稿で問題にしているような表現とは少し違っている。一方、(25)では une chemise 「書類鞆」の色を表わすだけなら une chemise *couleur bleu ciel*,

もしくは *de couleur belu ciel* としても意味は変わらないが、この例では続く文において靴の色 *couleur bleu ciel* を対象とするので、定冠詞を伴う本来の名詞として導入するために特徴を表わす前置詞 *à* を取っていると考えられる。このように *à* によって導入されている場合は別の理由によるものであり、*couleur* を含む表現の出発点に十全な前置詞句があったと仮定すると、それはやはり以下の様な *de couleur de*+名詞という構造であろう。

(28) *un manteau de couleur de muraille* 「灰色のマント」

ところで二次的な色の表現においては、以下のように *couleur* だけでなく、基本色を表わす語も *couleur* を介さずに二次的な色を表わす要素を導入することができる。さらには *couleur* と基本色を表わす語が共に用いられる場合もある。

(29) *des cheveux couleur paille* 「麦わら色の髪」

(30) *une cravate jaune paille* 「麦わら色のネクタイ」

(31) *du tissu couleur jaune paille* 「麦わら色の布」

二次的な色というのは、一般に基本色のバリエーションとして認識される。たとえば上記の例の「麦わら色」というのはフランス語においては *jaune* 「黄色」のサブカテゴリーとして認識されている⁸。 *jaune paille* と表現する場合は色彩の基本カテゴリーとして *jaune* が明示化されていることになる。さらに *couleur* が用いられる場合は、修飾・限定が色彩についてであるということが明示されるわけである。従って *couleur jaune paille* という表現は意味的にはかなり余剰的な表現ということになるが、商品の説明のような文脈ではよく見られる。逆に二次的な色合いを表わす意味が定着し、文脈的にも問題がなければ *manteau aubergine* 「ナス色のコート」のように直接的な修飾・限定が可能になるのである⁹。

ときに以下のような変則的な表現も見られる。

(32) *Celle (=blouse 「仕事着」) des infirmières sont roses, celles des chefs de service, blanches et celles des aides-soignantes, vertes, couleur poubelle.* (Perrrin : 56)

「看護助手の仕事着は緑、ゴミ収集容器のあの緑色である」

当該箇所を文の形で書けば *les blouses des aides-soignantes sont vertes, couleur poubelle* となる。修飾要素がなく基本色を表わす *vert* は形容詞として性数の一致をしているが、語り手はさらに緑のニュアンスを明示（確認）するために、二次的な色彩表現である *couleur poubelle* をあとから付加しているのである¹⁰。カンマを挟まない、つまり後からの確認では

⁸ 各言語、すなわち各文化において色彩表現の指示する範囲が特に周辺部分においては厳密に対応しないことは言うまでもない。フランス語と日本語に関しては、一般に「黄色」と訳される *jaune* が指示する範囲が日本語話者が「黄色」に対して持つイメージとかなり違う場合がある。シムノンのよく知られた作品に *Le chien jaune* 「黄色い犬」というタイトルのものがあるが、ぬいぐるみや童話ならともかく、「黄色い犬」という日本語の表現自体が既に不自然である。これに関連して日本語の「赤犬」という表現の「赤」が表わす色の範囲も考え合わせると興味深い。

⁹ ただし *paille* については *cheveux paille*、*cheveux de paille* という表現は色彩表現ではなく乾燥してチリチリになった髪の様態を表わすので、*paille* を色彩表現として理解するには *couleur* や *jaune* が必要である。また *bleu nuit* 「濃紺色」のように基本色を表わす語を省略すると色彩表現として理解しにくいものもある。これらの表現では2語がより緊密な一体をなして二次的な色を表わしている。これら以外にも基本色に何らかの要素が後続・付加されて二次的な色彩のニュアンスを表わす表現形式にはいくつかのタイプがあるが、本稿では詳細に立ち入る余裕はない。

¹⁰ (*couleur*) *vert poubelle* という表現はたとえば *vert bouteille* 「深緑色」などとは異なりほとんど用いられておらず、色彩表現としては一般的ではないと思われる。そのことが結果的に例(32)のような表現を生み出した可能性もある。

なく *vert couleur bouteille* 「深緑」のように＜基本色+couleur+二次的なニュアンスを表わす名詞＞という形式も若干は存在するようである。

参考までにここまでに見たいいくつかの表現を基本色を明示した形で示しておく。

- (33) *vert caca d'oie* 「黄緑色」、*brun café au lait* 「カフェオレ色」、*rouge rouille* 「錆色」、*jaune beurre frais* 「薄黄色」、*violet aubergine* 「ナス色」、*rouge / rose saumon* 「サーモンピンク色」、*brun pain d'épice* 「キャラメル色」

2. 3. *d'un bleu outremer* 型について

二次的な色彩を表わす表現が *couleur* を用いないで以下の様な形式を取る場合がある¹¹。

- (34) *je remarquais combien ses yeux étaient clairs, gris, ou d'un bleu délavé. Gris-bleu.*
(Modiano : 73)

「彼の眼がどれだけ澄んでいて灰色、というかにじんだ青色なのだという事に気付いた。つまり灰青色なのだ」

- (35) *ses yeux d'un bleu outremer* 「群青色の彼女の眼」

- (36) *La forêt était étourdissante. De toutes petites feuilles d'un vert très clair, d'un vert tellement naturel qu'il me semblait artificiel, le vert de quand on pense au vert :*
(Marie : 118)

「森は輝くばかりだった。とても明るい緑色、あまりに自然な緑でまるで人工的に思われる緑、緑色のことを考えたときに浮かぶ緑をした無数の小さな葉がいっぱいで。」

- (37) *Ses yeux d'un beau gris délavé brillaient d'un éclat espiègle, (...)* (Giordano : 11)
「彼女のきれいなにじむような灰色の眼はいたずらそうな光で輝いていた」

- (38) (...) *l'herbe y est d'un vert si profond, la maison est juste en face de l'Angleterre, on peut voir la côte par temps claire.* (Haroche : 36)
「草はそこではあまりに深い緑色をしていた」

- (39) (バッグの宣伝コピー) *Sacoche en cuir de vachette noir et tissu bleu nuit. Sacoche idéale pour de petites sorties. Tissu lainage d'un bleu nuit intense.*
「黒の仔牛皮と紺色の毛織物を用いたバッグ、(...) 深い紺色の毛織物」

これらの例では色彩を表わす *vert* などは名詞としてサブカテゴリーであることを表わす不定冠詞を取り、さらに形容詞化のための前置詞 *de* を取っている。(36)では *vert* は従属節中で代名詞で受けられている。色彩表現が属詞となる(38)では *si profondément vert* と *vert* を形容詞として文を構成できないことはないが、*d'un vert si profond* とするほうがエレガントである。この2例を除いた例ではここまでに見てきたように *de* と不定冠詞を取らずに *ses yeux bleu outremer* のように直接的に修飾・限定することができる。興味深いのは例(39)で、最初は *tissu bleu nuit* と直接的な形式になっているが、その後で *Tissu lainage d'un bleu nuit intense* と *de*+不定冠詞+色彩名詞の形式に変わっている。二つ目の例では *bleu nuit intense* と程度を強める表現が付加されてさらにサブカテゴリー化されているので不

¹¹ 1例のみだが *couleur* を含んだ...*d'un vert couleur bouteille* という例も採集例の中に見つかった。

定冠詞を伴う名詞としての表現が好まれたかとも考えられるが、もちろん *moquette (couleur) bleu nuit intense* のような直接的な表現も可能である。繰り返すが *de* を取る形式では色彩を表わす *vert* などはもちろん名詞である。そして色彩を表わす名詞は基本的に男性名詞である。バラという花を表わす場合は女性名詞である *rose* も、ピンク色という意味の色彩名詞の場合は男性名詞となる(例：*une robe d'un rose saumon*)。

2. 4. 直接的な表現の発展

さて *ses yeux d'un bleu d'outremer* という分析的な形式と *ses yeux bleu outremer* という直接的な形式の存在は、*côté* や *niveau* が十全な前置詞句から前置詞や冠詞を失って機能語化した場合の形式の変化に対応しているように見える(例：*au niveau de transport* → *niveau transport* 「輸送に関しては」)。

色彩表現の場合は *couleur* を含む場合と含まない場合とが存在するので、問題が少し複雑になる。*couleur* という語を含む場合は既に述べたように <*de couleur de*+名詞> という形式から文法化によって *couleur* が色彩のサブカテゴリーを導入する機能語になったと考えられるが、それでは *couleur* を介さずに直接先行の名詞の指示対象が持つ二次的な色彩を表わす *une voiture bleu nuit* のような表現はどのようにして誕生したのだろうか。それには複数の可能性が想定できる。まず文法化を経て機能語となった *couleur* で導入される *une voiture couleur bleu nuit* タイプの表現において余剰的な *couleur* が省略されて *une voiture bleu nuit* という形式が生まれたということが考えられる。実際、基本色を表わす *bleu* の意味には *couleur* が表わす色彩という意味は含まれている。従って意味の余剰性がよりコンパクトな形式の使用を促したということになる。

一方、2.3.で見たような前置詞 *de* によって導入される *ses yeux d'un bleu outremer* のような表現から直接的に前置詞と不定冠詞が省略されて *ses yeux bleu outremer* ができたという可能性も考えられる。*d'un bleu outremer* のように不定冠詞が用いられている場合はブルーの二次的な色(サブカテゴリー)であることが明示されている。しかし *bleu outremer* が色の表現として十分定着すればサブカテゴリーであることを不定冠詞の使用で明示する必要はなくなる。そして *bleu outremer* という表現もより緊密になり、不定冠詞と共に前置詞も省略されて直接に先行の名詞を修飾・限定しやすくなると考えられる。二次的な色彩を表わす場合に形容詞は無変化になるとされるが、*ses yeux bleu outremer* の *bleu* はあくまでも名詞と考えられる。*couleur* が用いられる場合の *couleur bleu nuit* のような表現においても *bleu*、あるいは *bleu nuit* は(無変化の)形容詞ではなく名詞と考える方がフランス語の修飾・限定の現代的な傾向に合致する。二次的な色を表わす場合など限定が付くと色彩の形容詞は無変化になるという、理由のない不自然な説明もする必要がなくなる。

それでは実際には上に述べた二つの変化のプロセスのどちらが起こったのだろう。この二つのプロセス、つまり *couleur* を含む表現が *couleur* を省略して用いられるようになる変化と、*de* と不定冠詞を用いた表現が *d'un* を省略して *ses yeux bleu outremer* になる変化はいわば同時に生じたと考えるべきだろう。ただ現実的には二次的な色を表わす表現の

バリエーションの一つとして **ses yeux bleu outremer** 型が出現したのであって、フランス語話者の意識やフランス語の歴史の中ではその起源となった表現は上記の二つのいずれであるかは判然としないと言える。フランス語において後続の名詞表現によって先行のヘッド名詞を修飾・限定するという構文が用いられる頻度が高くなっていく傾向に助けられて **des yeux couleur bleu nuit** や **des yeux bleu nuit** という表現形式が出現して、いくつかのバリエーションを巻き込みながら定着してさらに発展してきたと考えられる。

3. 結論に替えて

couleur という機能語に焦点を置きつつ、**couleur** を使用しない場合も含めて現代フランス語における二次的な色彩を表わす表現の実態を観察して、特に後続名詞による先行名詞の修飾・限定という観点から考察をおこなった。

まず **couleur** という語の有無も含めてその表現形式が多彩であることが確認できた。主な表現形式を再掲しておく¹²。

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------------|
| i) des yeux de couleur d'outremer | ii) des yeux couleur d'outremer |
| iii) des yeux couleur outremer | iv) des yeux bleu outremer |
| v) des yeux couleur bleu ciel | vi) des yeux outremer / des yeux ciel |
| vii) une robe bleu couleur océan | viii) des yeux d'un bleu outremer |

最初に分析的な構文を取るか直接的な表現を選ぶかという選択がある。次に、直接的な表現形式においては(色彩 **couleur**) → (基本色) → (二次的な色) という三つのカテゴリーレベルのうち、上位二つのカテゴリーを共に明示するか、どちらか一方だけを表わすかが選択され、その結果として選択された表現をどう組み合わせるかによっていくつものバリエーションが生まれる。直接的な表現形式においては名詞が二つないしは三つ連続することになるが、それらの表現が定着して広く使われるようになった背景には、現代フランス語において後続名詞が先行のヘッド名詞を修飾・限定するという「構文」が好まれる傾向が拡大・発展してきたということがあるのは間違いないだろう。

類似の形式を取る **côté** や **niveau**、あるいは **genre**, **façon** などの文法化の場合と異なり、色彩表現の場合は前置詞を用いる分析的な形式から直接的な形式に歴史的に変化したというより、現代フランス語に見られる名詞を連続させるいくつかの類似の表現の発展の影響を受けて直接的な形式が生まれ、次第に一般的になっていったと考えられる。その一連の流れの中で **couleur** も機能語として文法化を経たと考えられる。春木(2016)で検討した表現の中にも **question** のように起源となる前置詞句がないにもかかわらず、**côté** や **niveau** など意味領域や機能が似た名詞が前置詞句から出発して機能語へと文法化していく現象の影響を受けて、機能語としての役割を獲得した例もある。二次的な色彩を表わす複数の表現形式もその変化のプロセスは明確ではないが、現代フランス語が許容する<名詞+名詞(句)

¹² できるだけヘッドの名詞と二次的なニュアンスを表わす表現を同じにしたが、実例が確認できなかった場合はヘッドの名詞と二次的なニュアンスを表わす表現を変更した。実際、ヘッドの名詞や二次的な色彩を表わす表現に関する様々な要因で、常にすべての形式が可能になるわけではない。

＞という構文形式の中で色彩表現特有の条件に合わせて様々な表現が用いられるようになり今に至っていると考えられる。

二次的な色彩表現においても一つ見逃せないのは、文法化を経て機能語として確立した *couleur* を省略した表現が可能であり、さらには基本色を表わす語も省略して二次的な色彩を表わす要素のみで表現が成立する場合が多いという点である。これはいわば「～のような色」を表わす要素なしで二次的な色彩を表わしており、隠喩的な表現形式と考えることができる。一方、日本語では基本色以外の場合は「麦わら色」のように「色」という要素が必要であり、これは直喩的な表現と言える。名付けにおいても日本語は直喩を好むが、フランス語は *croissant* 「三日月」という語で三日月型のクロワッサンを表わすような隠喩的な表現を好む。オノマトペ表現に関しても、日本語は「(と) いう音」と直喩的に導入するが、フランス語ではオノマトペがそのまま文の構成要素になることができる。

本稿ではフランス語における二次的な色彩を表わす表現という、一見マイナーに思える現象について考察したが、それらの表現においても、フランス語で拡大発展をみている先行名詞を後続名詞が修飾・限定するという構文への嗜好と、フランス語が全般的に隠喩的な表現を好むという現代フランス語を特徴付ける二つの傾向を如実に見ることができた。

[引用作品]

Bourdeaut, Olivier, *En Attendant Bojangles*. 2015, Finitude, ; Darrieussecq, Marie, *Notre vie dans les forêts*. 2017, folio. ; Giordano, Raphaëlle, *Ta deuxième vie commence quand tu comprends que tu n'en as qu'une*. 2015, Eyrolles. ; Haroche, Raphaël, *Retourner à la mer*. 2017, folio. ; Modiano, Patrick, *Dans le café de la jeunesse perdue*, 2017, folio. ; Margerand, Laure, *Le Jardin des étoiles mortes*. 2019, J'ai lu. ; Perrrin, Valérie, *Les oubliés du dimanche*. 2015, Le livre de poche. ; *Les restaurants du cœur, 13 à table !* 2021, pocket. ; Sandrel, Julien, *La chambre des merveilles*. 2018, Le livre de poche. ; Szabó, Magda, *La ballade d'Iza*. 1963, Le livre de poche.

[参考文献]

Grevisse, Maurice (1975), *Le bon usage (10^{ème} édition)*. Duculot.

Noailly, Michèle (1990), *Le substantif épithète*. PUF.

Noailly, M. (2006), Quoi de neuf côté préposition ?, *Modèles linguistiques* 53 : 75-90.

春木仁孝(2016)「話し言葉における名詞の機能語化について ―côté, question, façon, genre, style, histoire de, etc.―」『フランス語学の最前線』第4巻 : 85-125. ひつじ書房.

春木仁孝(2017)「直喩的な日本語、隠喩的なフランス語」『時空と認知の言語学』VI (大阪大学大学院言語文化研究科) : 31-40.

春木仁孝(2020)「疑似引用マーカーあるいは発話連結辞としての *genre*」『時空と認知の言語学』IX (大阪大学大学院言語文化研究科) : 21-30.

春木仁孝(2021)『フランス語の発想―日本語の発想との比較を通して』くろしお出版.